

成功へのキセキ

南の国の「ナンデシ」税理士

第16回 人生の不条理を思う

昨年、私は立て続けに、ごく近い友を亡くしました。一人は、大学時代の親友といってもよかった友人K子。もう一人は、税理士仲間だったH先生です。

H先生とは、税理士会のお仕事で同じ役職だった期間が長く、使っている会計ソフトが同じだったこともあって、本当につい最近まで、電話で仕事の悩みを相談しあっていた間柄です。体調が悪いのは知っていましたが、こんなに早く逝ってしまうとは思いませんでした。

K子は、大学生の4年間、その後の人生を決定づける重要な人生の一時期、もっとも長く、濃い時間を共有した友人でした。ともに地方から上京し、一人暮らしをしていたことや、実家が厳しく、東京で羽目を外しがちな娘を、遠くからしっかりコントロールしようという親の目をいかにごまかすか(笑)など共通点が多く、二人でアリバイづくりをしあった仲です。

二人とも演劇が好きで、一緒に芝居を観に行ったり、人生とは何かという哲学を議論したり、恋バナで盛り上がりつつあるうちに、気が付けば朝になっていたりなど、私の青春の思い出のシーンには、いつも彼女が登場します。

私が税理士になった直後に彼女も独立し、原&アカウンティングパートナーズの3番目のお客様になってくれました。税務署への届け出書類を作成していると、「あの尚美ちゃんも、こんな事ができるようになったのね〜」と、誉められたのか、けなされたのが(笑)、昨日のこのようです。

二人とも、コドモを一人もうけ、その後の人生を怒涛のように駆け抜けました。仕事が好きで、「暇さえあれば」、むちゃくちゃに働いてきたのも共通点です。

「少しは休まないで、そんな無理していたら、身体こわすよ」

お互いに自分のことは棚にあげて、相手の身体を心配したものです。そんな彼女が病に倒れたのは5年前のことでした。

昨年の3月、私は彼女に無性に会いたくなりました。けれど約束の1週間前、彼女からキャンセルの電話。仕事が忙しくて、時間がとれないというのが、その理由でした。

「大丈夫よ。私はまだまだ死なないから。またいつでも会えるわよ」「そうね、またね」

確定申告の真っただ中、自分自身も忙しいのをいいことに、私はそう答えました。「またね」なんてないのに。もう二度とないのに。

あとで知ったのですが、その頃、彼女の体調はかなり悪化していたそうです。

そして昨年の夏、仕事のスケジュールをたっぷり残したまま、彼女はあっという間に、旅立ってしまいました。

人生は、不条理です。なぜ、「彼女」でなければならなかったのか。なぜ、「彼」でなければならなかったのか。

今までの苦労が報われて、これからやっと、人生の果実が味わえるというときなのに。コドモを育て、たくさんの人たちに慕われ、その人たちの人生に貢献し、社会になくってはならない存在だった二人。なぜ、二人は選ばれてしまったのでしょうか。

私のお気に入りの本のひとつに、内田樹さんという哲学者が書いた、『邪悪なものの鎮め方』(文春文庫)があります。世の中の不条理について書いたものですが、内田樹さんが若いころ、学生運動をしていたときの話が載っています。当時の学生運動は、今では考えられないほど激しく、文字どおり命をかけて、学生と機動隊がやりあったようです。機動隊のふり下ろした鉄パイプが、「たまたま」内田さんの隣にいた学生の頭に当たり、見ず知らずの学生さんは、命をおとしたのです。

なぜ、自分ではなかったのか。「神」に選ばれたのが、自分ではなく、隣にいた学生だったことに、何の理由も、法則もない。

内田樹さんは、そこに人生の不条理を感じたと述べていらっしやいます。

人生はすべて、考え方ひとつで変わります。一つの事象を、こちら側から見たときとあちら側から見たときでは、まったく違う世界が見えるものです。

そう教えてくれたのは、戸沢暢美の菩提寺の住職さんです。彼女の葬儀のあと、「死」について、住職さんは次のように、話してくださいました。

「この世」がプールなら、「あの世」はプールサイドの

◆筆者 原 尚美 (はら なおみ) プロフィール

税理士。東京外国語大学卒業。TACの全日本答練(現:全国公開模試)「財務諸表論」「法人税法」を全国1位の成績で、税理士試験に合格。直後に出産。育児と両立させるため、1日3時間だけの会計事務所からスタートし、現在は全員女性だけのスタッフ30名、一部上場企業の子会社やグローバル企業の日本子会社などをクライアントにもつ。ミャンマーに会計サービスの会社を設立し、海外進出支援にも力を入れている。著書に「小さな会社のための総務・経理の仕事がわかる本」「小さな起業のファイナンス」(いずれもソーテック社)、『51の質問に答えるだけですぐできる「事業計画書」のつくり方(日本実業出版社)』『トコトわかる株式会社のつくり方(新星出版社)』『世界一ラクにできる確定申告(技術評論社)』『一生食べていくための土業の営業術(中経出版)』など。その他、「経理ウーマン」「デイの経営と運営」など雑誌への寄稿や、商工会議所、中小企業投資育成株式会社、日本政策金融公庫などでの、セミナー実績も多数。

ようなものです。この世に生をうけるということは、プールサイドから、プールの中に突き落とされるようなもの。プールの中は苦しいので、毎晩、私たちは「あの世」で息継ぎをするために、眠りについているのです。だから、「あの世」に還るということは、ちょっと悲しいことではないんですよ、と。

あのとき私は、住職さんの話をきいて、確かに救われました。

ポジティブ・シンキングという考え方があります。何かつらいことがあっても、それには必ず意味がある。前向きに向き合うことで、人生は必ず今よりよくなる、というような思考法です。

また、何にでも感謝しなさい、と教える本もあります。そうすれば、人生は好転するからと。たとえ病気になるっても、健康なときなら気付かなかった、たとえば家族の愛情に気付くことができるというような考え方です。そういう本には、病気をつらいと思わないで、むしろ感謝の気持ちを持つと良いと書いてあります。

けれど、凡人の私は思います。自分の命に期限を切られたとき、とても感謝なんてできない。納得なんてできない。なぜ、私なの?と、人生の不条理を呪うのではないかと思います。亡くなった二人も、なぜ、自

分が?とあってやっぱり悔しかったのではないだろうか…。そんな風に思うのです。

戸沢財団の仕事をしていると、同じような気持ちになることがたくさんあります。コドモは親を選べない。親から育児放棄されたり、暴力を受けたり、なかには親の暴力のために4〜5歳で命を落とすコドモもいます。記憶に新しいところでは、川崎や寝屋川の事件で、中学1年生のコドモたちが亡くなりました。なぜ彼らは、恐怖の中で命を奪われなければならなかったのか、その不条理に心が痛みます。この世に生をうけて、まだ人生の喜びを知らないまま、なぜあんな酷い死に方をしなければならなかったのかと。

日本だけではありません。ミャンマーやバングラデシュ、シリアなど、世界では、貧困や戦争で命をおとすコドモたちがたくさん、たくさんいます。

毎日、平和で、健康で、何物にもおびえることなく暮らしていけることは、決して当たり前のことではなく、奇跡的な幸運なのではないかと、思うのです。そして、その運命の奇跡に感謝しつつ、与えられた命を精一杯生きていきたいと、年の始めにあらためて思います。

みなさま、今年もどうぞよろしくお祈りします。

新刊発売

ひと月3分、ムダ0確定申告

原 尚美・山田 案稜 著(技術評論社)
1,580円+税

経験や知識がゼロでも青色申告したい人のために、税理士が教えなくなかった最強の節約術を、フリーランス目線で解説した確定申告本。7割の人が見落としている経費や、落とせる経費と、落とせない経費のぶっちゃんけ境界線など、めんどろな申告を1秒でも早く終わらせたい、悩ましい経費の悩みをゼロにしたい人にオススメです。

原尚美・山田案稜

「freee対応」
「最強の節約術」
「税理士が教えなくなかった」
「7割の人が見落している」
「経験・知識がゼロでも青色申告したい」
「めんどろな経費の悩みをゼロにしたい」
「確定申告を1秒でも早く終わらせたい」